



目次

研究科長挨拶	平山 雅浩	2
新入生へのお祝いと激励のメッセージ	榊屋 正浩	3
令和6年度医学部医学科入学者選抜結果について	成田 正明	4
令和6年度医学部看護学科入学者選抜結果について	片岡 三佳	4
大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、 医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について	俵 功	5
大学院医学系研究科看護学専攻の修了・入学状況および近況について	磯和 勅子	6
定年退任して新しいアカデミア旅立ちへの挑戦	ガバザ エステバン	7
退職のご挨拶	湊藤 啓広	9
退職のご挨拶	林 智子	11
退任ご挨拶	堀 浩樹	12
退職のご挨拶	村田真理子	13
着任のご挨拶	河口 浩介	14
着任のご挨拶	神谷 元	15

トピックス

第82回日本癌学会学術総会JCA若手研究者ポスター賞ならびに

日本患者由来がんモデル学会学術集会2023ポスター賞受賞のご報告

第85回日本臨床外科学会総会優秀演題賞を受賞して

第61回日本癌治療学会学術集会Young Oncologist Awardを受賞して

三重大学病院賞を受賞して

第62回日本鼻科学会総会・学術講演会で若手優秀発表賞を受賞しました

ORS 2024 tendon section podium awardを受賞して

第62回 日本臨床検査医学会東海・北陸支部総会、

第346回 日本臨床化学会東海・北陸支部例会 連合大会

（テーマ：感染症、備えよ常に－臨床検査の責務－）開催のご報告

第8回西日本医学生学術フォーラム

審査員口頭発表部門 最優秀賞を受賞して

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会

English session awardを受賞して

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会

ポスター優秀演題賞を受賞して

第144回日本薬理学会近畿部会優秀発表賞を受賞して

学会だより

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会開催

特集「黒潮医療人養成プロジェクト第2回合同シンポジウム」

第290回日本小児科学会東海地方会を主催して

2024ワールドキャンサードーへの参加と

三重大学医学部附属病院からのご報告

学位記授与式

研究科長挨拶

医学系研究科長・医学部長 平山 雅浩



2024年4月1日より三重大学大学院医学系研究科長・医学部長を拝命いたしましたのでご挨拶させていただきます。私は1986年三重大学医学部を卒業した後

に小児科医として診療・研究・教育に従事してきました。2016年1月に小児科学教授、2019年10月から医学部附属病院副院長を務めて参りました。

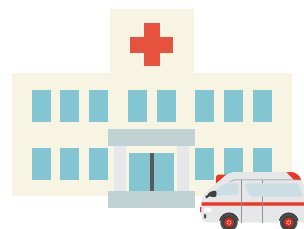
三重大学医学部医学科は1944年4月に開校した三重県立医学専門学校が前身であり、1972年の国立移管を経て、2024年4月で開校80周年を迎えます。主に大学院教育を担う医学系研究科と学部教育を担う医学部に分けられ、医学部は医学科と看護学科から構成されています。また、医学部には県内唯一の特定機能病院である附属病院が設置されています。医学科は三重県における唯一の医師養成機関であり、看護学科は三重県における看護師、助産師、保健師養成の高等教育機関として、附属病院は高度先進医療や臨床研究の拠点であるとともに医学科、看護学科学学生の教育病院として、その役割を果たしています。「確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな想像力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する」を目標としています。

2004年大学改革で独立法人化してから20年を迎えようとしていますが、2022年度からの第4期中期目標期間も3年目に入り、益々大学の独立性、独創性が問われる時代となっています。文部科学省から配分される運営費交付金は毎年約1.2%がカットされる中、教育研究の成果による重点支援

や機能強化経費による再配分により、その真価が問われています。それには徹底した教育改革、世界の知をリードするイノベーション、地域中核としての地方創生などを達成する必要があります。医学系研究科長としての役割は教育、研究、医療、社会貢献を行うことであり、医学科、看護科、附属病院が一丸となって活動するために、リーダーシップを発揮し、全ての力を結束して優れた教育、卓越した研究、最先端の医療及び地域および国際社会への貢献に導く使命があると考えます。

三重大学医学部は医師、看護師、研究者などの専門職を育成する場であり、優れた教育プログラムを提供いたします。医学や健康科学の研究を推進し、新たな知識や技術の開発に貢献するとともに、先端技術の導入や新たな治療法の開発を通じて医学の進歩に重要な役割を担います。また、三重大学医学部は地域社会と密接な関係を築き、地域のニーズに応えることを重視します。国際社会においても国際的な学术交流や国際協力プロジェクトを通じて、世界の健康向上に寄与します。

このように三重大学大学院医学系研究科・医学部は、教職員と学生とが一丸となり、未来につながる高水準の医学教育と先端的医学研究を推進するとともに、地域社会や国際社会に貢献し、医学の発展と社会の健康と幸福を向上させることを目指します。今後とも皆様のご理解と支援を賜りますようお願い申し上げます。



新入生へのお祝いと激励のメッセージ

看護学科長 榎 屋 正 浩

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。大学生としての新たな一步を踏み出す皆さんの門出を心からお祝い申し上げます。2020年1月から新型コロナウイルス感染症が急速に広がり、2023年5月からは感染症法上の5類に分類されたとはいえ、様々な制約の中で3年間しかない高校生活を過ごされてきたことと思います。そのような状況下でも、しっかり勉強して大学に入学された皆さんに、心より敬意を表します。

大学生になったのだから、クラブやサークル、アルバイトなどやりたいことが一杯のことでしょう。それらはもちろん大切ですが、学業の習得もしっかりと行っていただきたいと思います。そのために三重大学は教育目標を掲げています。

三重大学の教育目標は、「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」と「行動する力」を総合した「生きる力」を養い、幅広い教養を身につけるとともに高度な専門知識や技術を有し、国際的な視野を持ち、社会のイノベーションを推進できる人材を育成することです。これからの4年間の大学生活でこれら4つの力を身につけるように頑張ってください。看護学科としても、「豊かな人間性」と「高度な専門的資質」を身につけ、生涯にわたって学び続けることができる看護専門職を育成したいと考えています。

さて、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステムの推進に向け、医師・看護師・助産師・保健師・薬剤師・栄養士・理学療法士など多職種が連携して適切な保健・医療・福祉を提供することが期待されており、中でも看護職には患者の多様性に対応できる能力が求められています。そこで、今年度から在宅看護学分野を新設いたしました。

看護学科のカリキュラムは、論理的・批判的思考やリサーチマインドを強化し、地域あるいは国際的な視点に立って活躍できるリーダーを育成することを目指した内容となっています。皆さんには、これからの4年間、(1)主体的に判断して行動すること、(2)他者と協働して思考・表現できるコミュニケーション力や科学的思考力といった、生涯に亘り学び続ける際の基本姿勢を養っていただくことが求められます。高校までの教員から学ぶ受動的学習ではなく、常に疑問や課題を見出し、その理由や解決方法を自ら探求する能動的学習を継続して実施する必要があります。

さらに、皆さんは看護学を学び、看護職という専門職を目指すわけですから、知識や技術の修得のみならず、看護専門職としての適切な判断力・行動力・自己研鑽力などのプロフェッショナルリズムや医療者としての倫理観も身につけてほしいと思います。皆さんには、看護師だけでなく助産師や保健師、さらには専門看護師や研究者として活躍する道が開かれています。自らが理想とする看護職を想像しながら、それに近づくために何をすべきかを考え、日々努力してほしいと思います。

大学に入学されたのですから、クラブやサークルなどの課外活動にも参加する中でコミュニケーション能力を身につけ、様々な機会を利用して見識を深めることをお勧めします。輝かしい未来に向けて頑張ってください。



令和6年度医学部医学科入学者選抜結果について

医学科入学試験委員長 成 田 正 明

令和6年度入試募集人員は推薦40名（一般枠10名程度、地域枠A 25名程度、地域枠B 5名程度）、前期日程75名（一般枠70名程度、三重県地域医療枠 5名程度）、後期日程10名程度の計125名であった。

学校推薦型選抜では大学入学共通テスト（1月13、14日）の成績により一次選抜を行い、2月9、10日に小論文、面接を行った。その結果、41名が合格した。

前期日程試験は599名の志願者があり、1次選

抜を実施した後、2月25日に数学、理科、外国語の試験が、26日には個人面接が行われ、75名が合格した。

後期日程試験は229名の志願者があり、前期日程と同様に1次選抜を実施した後、3月12日に小論文と個人面接が行われ、10名が合格した。

最終的に125名が入学手続きをした。

試験の実施に御助力いただきました諸先生方に深謝いたします。

令和6年度医学部看護学科入学者選抜結果について

看護学科入学試験委員長 片 岡 三 佳

令和6年度入学試験は、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが、令和5年5月から季節性インフルエンザなどと同じ「5類」に移行したことより、それに準じた対応するなかで行われた。

医学部看護学科では、三重県の優秀な人材が、卒業後も県内で看護職として働いてくれることを目的とし、平成29年度入試より推薦入試の募集人数を20名に増やし、地域枠での募集を拡げてきた。募集人数の内訳は、推薦入試20名（地域枠13名程度を含む）、社会人特別入試3名、前期日程52名、後期日程5名の合計80名であった。

看護学科の入試は8月の社会人特別入試から始まる。社会人特別入試とは、5年以上の社会人経験があり、本学科に入学を希望する者を対象としている。TOEICスコア500点以上を出願要件とし、試験科目は小論文および面接である。今年度は1

名の出願があり、合格した。

学校推薦型選抜については、志願者は52名で2年ぶりに上昇した。第1次選考は本年2月5日に実施、大学入学共通テストの成績に基づき30名を選抜した。第2次選考は2月9日に実施、面接試験を行った。その結果20名が合格、全員が入学手続きを行った。昨年と同様に地域枠13名、地域枠以外7名となった。

前期日程は、2月25日に数学または国語、および外国語、2月26日に面接の試験が行われた。令和3年度から個別学力検査の教科を増やし、これまでの外国語に加えて、数学または国語から1教科を課すとともに、今年度より面接の得点化が導入された。今年度の志願者は170名で（昨年度112名）、実際に受験した者も141名（昨年84名）で増加した。その結果56名が合格し、53名が入学手続

きを行った。

後期日程は3月12日に実施し、小論文と面接試験が行われた。今年度の志願者は161名で、昨年の84名に比べてほぼ2倍となり、実際に受験した者も49名（昨年度10名）で、例年と比べると約5倍となった。その結果、8名が合格し、6名が入学手続きを行った。

最終的に、社会人特別入試1名、学校推薦型選抜20名、前期日程53名、後期日程6名の合計80名が入学手続きを完了し、内訳は男性2名、女性78

名、県内出身者38名（48%）、県外出身者42名で、県外出身者の割合が上昇した。

最後になりましたが、今年度も入学試験が滞りなく実施できたのは、ご協力をいただきました事務職員ならびに教員のみなさまのおかげです。ありがとうございました。

令和6年度は、総合型選抜という新たな入試形態の検討があります。ひきつづき、お力添えくださいますよう、今後ともよろしくお願い申し上げます。

大学院医学系研究科生命医科学専攻（博士課程）、 医科学専攻（修士課程）の入学試験実施状況について

大学院委員会委員長 俵 功

令和5年度募集の大学院入試は、医科学専攻（修士課程）、生命医科学専攻（博士課程）ともに、令和5年8月と令和6年1月の2回行いました。

生命医科学専攻（博士課程）入試の合格者は36名で、8月入試で7名、1月入試で24名（うち大使館推薦による国費留学生が1名）、国費優先配置による留学生が4名、国際推薦制度による留学生が1名合格しました。令和5年10月入学者は11名でした。

上記合格者36名中、留学生を除く内訳は、社会人特別選抜（社会人向け）入学者は13名（うち医師は10名）、社会人特別選抜以外が17名（うち医師は17名）でした。また、36名中の医師の割合は75%（27人）となっており、三重大学医学部医学科卒は22名、本学修士課程からの進学者は1名でした。以上が令和5年度の入試報告となります。

次に大学院の現状について、ご報告いたします。

令和5年度は、前年度と比べ入学者がやや減少しております。その理由として新専門医制度の影響なども考えられますが、医学・医療の進歩には、

研究活動の継続とその成果の還元は欠かせませんので、先生方には大学院での研究活動を若い方々にご推奨いただきますようお願い申し上げます。大学院委員会では入学者を増やすべく、広報活動に力を入れてまいりました。ウェブサイトの充実等による大学院の周知とともに、毎年6月、11月に修士・博士の入試説明会を開催してきており、昨年度はオンラインで開催しました。6月の説明会では合計11名の参加があり、そのうち4名が修士課程へ、3名が博士課程へ出願されました。

定員12名の医科学専攻（修士課程）については、令和5年度10月入学と令和6年度4月入学で合計6名の入学者にとどまっており、定員充足率は目下の課題となっています。この課題を解決すべく、病院等でメディカルスタッフとして仕事をしている方々に入学を推奨するとともに、医学系研究科以外の他研究科との連携を考えております。

社会人が仕事を続けながら研究する社会人大学院制度は、文部科学省が推奨しているところです。本学でも社会人特別制度を設け社会人を積極的に受け入れるとともに、時間的、経済的支援制度を

設けています。時間的な支援制度としては長期履修制度があり、仕事を続けながら教育を受け研究活動を行う大学院生を支援しています。経済的支援制度としては、令和3年度から授業料の一部を奨学金として支援する制度を継続しており、奨学金の返還免除制度も修士課程に2枠、博士課程に1枠ありますので、利用をご検討ください。

医学系研究科には他にも特色があり、いくつか紹介します。令和4年度には、国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラムが文部科学省に採択されスタートしており、意欲ある留学生の本学での活躍が期待されます。令和5年度には、

「次世代のがんプロフェッショナル養成プラン」が採択され、これまでの事業と同様のがん医療における多様なニーズに対応できる人材の育成が期待されます。

以上の様々な取り組みによって医学系研究科が培ってきた知識と経験を活かした教育・研究ができることは、本学の強みであります。大学院修士・博士課程は、時代とともに学生および社会からのニーズが変わって参りますが、今後も大学院運営への皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。

大学院医学系研究科看護学専攻の 修了・入学状況および近況について

看護学専攻大学院委員会委員長 磯 和 勅 子

【大学院生の修了および状況】

看護学専攻では、博士前期課程を10名が修了しました。内訳としては、9月に小児看護学が1名、そして3月に看護管理学2名、実践基礎看護学1名、がん看護学（CNSコース）1名、成人看護学1名、老年看護学（CNSコース）2名、精神看護学1名、地域看護学1名でした。また、博士後期課程は、9月に看護教育学2名、3月に母子看護学1名、精神・ストレス健康科学から1名が修了しました。

2023年度は、新型コロナウイルス感染症が5類感染症に位置付けられたことから、基本的に対面授業となり、研究計画発表会などの大学院発表会は教員と学生が一堂に会して行われ、活発な意見交換によりそれぞれの研究を発展させるための有意義な機会となりました。

一方、新型コロナウイルスと共存する生活が継続したことにより、大学院生も教員もすっかりオンラインに慣れ、オンラインでの講義や研究指導

が普通に行なわれるようになりました。在学生の殆どが看護職に従事しており、ただでさえ多忙な大学院生にとって、通学や移動に要する時間の無いオンライン講義や指導は利点であり、それは大学院生のみならず教員にとっても同様であると思われます。

また、新型コロナウイルス感染症拡大により中止あるいは縮小しての学位記授与式が続いておりましたが、昨年度に引き続き2023年度も通常通りの学位記授与式を開催することが出来ました。学位記を手にした皆さんの笑顔を見ることができ、その場で一緒にお祝い出来たことを、心からうれしく思いました。大変な時期に大学院で学び、様々なことが思うように進まず、非常に苦勞されたかと思いますが、その経験がきっと次のステージへ進むための糧となるでしょう。

修了生たちが、大学院での学びをそれぞれの分野で活かしていくことを期待していますし、CNSコース修了生には、がん看護専門看護師および老

人看護専門看護師としての認定に向けて今後も精進されることを願っています。

【大学院生の入学状況】

2024年度看護学専攻の入学者については、博士前期課程入学生が6名（定員11名）でした。入学生の内訳は、実践基礎看護学1名、がん看護学1名、老年看護学1名、小児看護学2名、地域看護学1名でした。

博士後期課程は、入学生が2名（定員3名）、内訳は実践基礎看護学1名、母子看護学1名でした。

【看護学専攻の近況】

博士後期課程は9年目を迎えました。経過年数に比して修了生を輩出できていないというご指摘もありますが、2022年度の3名に引き続き、2023年度は4名が博士（看護学）の学位を取得することが出来ました。

2022年度から博士前期課程に在宅看護学が開設され、2024年度には小児看護学および精神看護学にCNSコースが新設されました。

また、令和7年度入試より、本学看護学科卒業後、ストレートでの入学志望者に対応した新しい選抜制度が開始されます。看護学の大学院は、臨床経験を積んでからと考えがちですが、近年では、ストレート進学者も増えてきており、専門的な知識や研究力を養うだけでなく、新たな人脈や職業の選択肢を広げることにつながりますので、学部学生の皆さんには、卒業後の進路選択の一つとして検討していただきたいと思っています。

大学院生たちの多くは、医療現場で働く看護職であり、仕事と学業を両立しながら研究に取り組んでおられますが、さらに教育・研究支援の環境を整え、2024年度も引き続き多くの修了生を輩出できるよう、大学院生とともに教員も頑張っていると考えています。

これからも、看護学の実践を通して医療・保健の質向上に貢献できる人（博士前期課程）、そして独自性豊かな看護学研究成果を生み出すことのできる人（博士後期課程）を育成していきたいと考えていますので、志気の高い看護職が大学院へ進学してくれることを願っています。

定年退任して新しいアカデミア旅立ちへの挑戦

三重大学医学系研究・医学部 基礎系医学講座 免疫学 教授 ガバザ エステバン



2006年に着任してから17年が経過し、皆様の温かい支援のおかげで無事に退任の時期を迎えることができました。これから新たなアカデミアの旅に挑戦する準備が整いました。過去を振り返ってみますと、1983年に医学部を卒業し、その後4年間大学病院で内科医として勤務しました。1987年には文部科学省の留学生として三重大学大学院医学系研究科

に進学し、1993年には博士課程を修了しました。その後、本学の教員として医学部生、看護学部生、大学院生の教育と研究に尽力してきました。皆様のご協力とご支援に心から感謝申し上げます。

医学の教育において、医学生は免疫学の基礎的な概念や原理だけでなく、すべての基礎医学分野、社会医学分野、臨床医学分野との密接な関連性や、実臨床の現場における応用や実践についても理解する必要があります。2006年に教授に就任して以来、免疫学講座では、私自身が臨床医として日々

の診療での解決困難な課題に直面していたことを忘れず、免疫学の基礎医学的な側面の理解に留まることなく、身につけた知識や技術を臨床現場での実践や応用に直結させることを重視した教育を心がけてきました。研究活動においても、免疫学講座は基礎研究と臨床研究の架け橋となるトランスレーショナル研究に取り組み、患者の健康への貢献を目指してまいりました。これまで、国内外の多くの研究室、研究機関、企業との連携を通じ、様々な疾患に関する共同研究を展開してまいりました。これらの活動の成果として、360編以上の論文を発表し、多くの論文が学位論文として認められました。海外からの留学生も積極的に受け入れ、多くの留学生の学位論文の作成指導にも携わりました。

免疫学講座と他の基礎系講座、臨床系講座との共同研究により得られた成果の一部をご紹介します。まず、市中肺炎および院内肺炎の予防法を開発しました。具体的には、臨床系講座と協力して市中肺炎および院内肺炎患者における最も重要な原因菌と予後因子を同定するための前向きの臨床研究を行いました。この成果をもとに、日本における肺炎のエンピリック抗菌薬療法のための臨床ガイドラインが確立され、23価肺炎球菌ワクチンの導入と高齢者の肺炎予防に貢献しました。この画期的な報告に基づき、2014年には23価肺炎球菌ワクチンが日本の高齢者に対する定期接種として導入・保険適用されています。また、がんや臓器線維症などの難治性疾患におけるプロテアーゼ、抗プロテアーゼ、免疫系細胞などの役割を解明しました。臨床および基礎研究を通じて、がん、臓器線維症、糖尿病、自己免疫疾患、炎症性腸疾患などの病態形成における、免疫応答、凝固・線溶系、抗凝固経路の関与を明らかにしてまいりました。これらの研究の成果に基づき、臨床試験を含む数多くの研究が国内外で展開されました。

さらに、新規治療法の開発とトランスレーショ

ナルメディシンの加速化を目指し、ヒト化疾患動物モデルを開発しました。難治性慢性疾患の発症機序を明らかにするため、ヒトの遺伝子を過剰発現させるトランスジェニック動物モデルを15種類以上開発しました。これらのヒト化疾患動物モデルに対して治療薬候補物質を投与する実験を重ね、がん、肺線維症、糖尿病、腎線維症、肝硬変、胃炎、網膜症、動脈硬化症などの疾患の発症機序を解明し、新規治療薬の候補となる物質の同定に成功しました。これらのin vivo疾患モデルは、難治性疾患におけるヒト遺伝子の役割を明らかにし、現在は薬剤開発やトランスレーショナルメディシンの研究に広く活用されています。さらに、新しいRNA干渉プラットフォームを開発し、ベンチャー企業や臨床系講座と協力してRNA干渉を基盤とした新しい治療法を開発しました。特に安定性や副作用の問題を解決するための研究を行い、その技術を用いて特発性肺線維症の患者に対する治療法の第1相臨床試験が米国食品医薬品局（FDA）によって承認され、進行中であります。また、細菌叢由来の新規蛋白の発見、難治性疾患におけるその役割の解明、およびその阻害剤の開発も行いました。急性臓器障害と臓器線維症に関するこれらの研究は、効果的な治療法の開発に向けた重要な一歩となっています。

以上の研究成果は、新たな学術的発見、疾患モデルの開発、新規薬剤の開発、特許取得、外部資金の獲得、競争的資金の獲得、国内外の多くの研究機関や企業との共同研究の実現につながり、これらの成果は三重大学の財産となっています。これまで築いてきた多くの研究室、研究機関、企業との連携を活かした研究体制をさらに発展させることができれば、三重大学のさらなる発展だけでなく、日本および世界の免疫学の発展に貢献できると考えています。

終わりに、定年退任は、人生の重要な節目であり、過去のキャリアを振り返り、将来の方向性を

定める貴重な機会であります。私にとって、それは単なる終わりではなく、新たな学問の探求への出発点であります。特任教授という新たな立場を最大限に活用し、これまで以上に研究に集中し、学术界での成果を追求していきます。長年の経験と知識を活かし、新しい研究テーマに積極的に取

り組むことで、自己の成長と発展を図りたいと思います。また、大学内外で積極的に活動し、三重大大学の知名度向上と若者の育成に貢献したく、学び続け、成長と発展を追求し、社会に貢献することで、定年退任を新たな挑戦への扉としたいと考えています。

退職のご挨拶

運動器外科学・腫瘍集学治療学（整形外科）教授 湊 藤 啓 広



2009年10月1日着任以来14年6ヵ月が過ぎました。2024年3月31日の退職にあたり、ご挨拶申し上げます。私は1958年8月12日に三重県四日市市で生まれました。父が銀行員であったため、幼少期は名古屋や東京に転居し、名古屋市の山吹小学校に入学、4年生からは現在の実家がある桑名市の大成小学校に転校し、6年生の2学期からは横浜市の本町小学校に転校しました。横浜市にある吉田中学校、光陵高校を経て、いずれは実家のある桑名市に戻るだろうということで、三重大学医学部を受験することになりました。学生時代は医学部バレーボール部、医学部軽音楽部（サニーオールスターズ）に6年間、医学部スキー部に2年間在籍しました。65歳になった今でもOB会ではバレーボールを、学会の会長招宴や病院忘年会ではピアノを、冬の整形外科医局旅行ではスキー・スノーボードを嗜んでいます。バレーボール部ではキャプテンを、軽音楽部ではバンドマスターをする機会に恵まれ、リーダーシップとは何かを学んだような気がします。1983年3月には無事卒業し、4月には三重大学整形外科に入局するとともに大学院に入学しました。整形外科を積極的に選んだわ

けではなく、消去法で最終的に残った診療科が整形外科だったという希薄な理由で整形外科医になりました。入局時の教授は初代教授鶴田登代志先生であり、「アルミニウム骨症に関する実験的研究」というテーマを頂きました。翌1984年には荻原義郎教授が就任され、同教授が懇意にされていた浜松医大の井上哲郎先生の影響でその当時上市され始めていた骨粗鬆症の治療薬の臨床研究に携わることになりました。1985年には「エルカトニンの骨粗鬆症に対する臨床的検討」という論文を発表しました。これが骨粗鬆症との出会いになります。その当時はまだPCやインターネットなるものは存在せず、手書きだった論文をやっとワープロで作成できるようになったり、ガッチャンガッチャンと一個一個漢字を拾って打つ写植機でブルースライドを作ったり、また、参考文献を集めるのも一苦勞でした。Persuasionが使えるようになった時は衝撃でした。1987年には学位を取得し、荻原教授の専門分野であった骨軟部腫瘍を担当することになりました。MTX、CDDPの効果が実証され、骨肉腫患者の患肢に対する治療が切断から温存へ大きく舵を切った頃でした。1988年にはRosen protocolで有名だったGerald Rosenが当時チーフを務めていたLos Angeles Cedars-Sinai Cancer Centerに留学しました。異文化に

接した衝撃とともにグローバルな考え方や見方を学ぶことができた貴重な経験でした。1991年には荻原教授から1年ぐらい外病院を経験しなさいと言われ、紀南病院で働くことになりました。大学病院以外で常勤医として働いたのは後にも先にもこの1年間だけでした。当時、一緒に働いていた笠井裕一先生に外傷の手術を教わったことを憶えています。1992年に帰学したところ、藤浪周一先生が骨軟部腫瘍を担当していたので、荻原教授の2つ目の専門分野であった股関節外科を担当することになりました。当時使用され始めたセメントレス人工股関節との出会いになります。鶴田教授が時期尚早ということもあり、人工股関節置換術を否定していたことを考えると隔世の感があります。しかし、1995年7月に荻原教授が58歳の若さでこの世を去りました。突然リーダーを失った教室は路頭に迷いました。研究棟はゲームセンターと化し、翌1996年5月に大阪大学から赴任された内田淳正教授からはぬるま湯的体質と表されるほどでした。内田教授の活により教室は一変しました。年に5編もなかった英語論文数が10編を超え、20編を超えるようになりました。しかし、2005年10月には平田仁先生が名古屋大学手の外科教授として三重大学から去ってしまいました。順当に行けば平田先生が次期教授になるのだらうと思っていましたので、私は焦りましたが、このチャンスを活かさねばという思いが強くなりました。充分とは言えませんでした、自分なりにできる準備をしました。また、内田教授が予定より1年早く三重大学学長に就任されましたので、タイミングにも恵まれ、2009年10月に教授を拝命することになりました。以後は、教室のために、入局者数の増加、英語論文数の増加、学位取得者数の増加、手術件数の増加を目指しました。その結果、2010年以降の入局者数は75名となり、2010年以降現時点までPubMedに掲載されている英語論文数は私の名前が入っているものだけで400編を超えまし

た。特に、2021年は年間47編に上りました。2009年10月以降の学位取得者数は修士課程4名、博士課程甲39名、乙27名の計70名となりました。手術件数も順調に増え、就任当初90件前後だった人工股関節置換術は年間120件を超えるようになり、他の診療班の手術件数も着実に増えました。また、2016年12月には松峯昭彦先生が福井大学整形外科教授に就任されました。とても嬉しい出来事でした。学会活動においては、日本整形外科学会理事、日本股関節学会理事、日本骨粗鬆症学会理事、日本骨・関節感染症学会理事、日本関節病学会理事などを拝命し、2019年4月に第132回中部日本整形外科災害外科学会学術集会、2020年10月に第47回日本股関節学会学術集会、2021年10月に第36回日本整形外科学会基礎学術集会、2023年6月に第46回日本骨・関節感染症学会、同年9月に第25回日本骨粗鬆症学会、同年12月に第42回整形外科バイオマテリアル研究会の学会長を務めさせて頂きました。さらには一般市民、薬剤師、医師などを対象とした学術講演を376回、国際学会での講演を6回、国内学会での講演を60回行いました。講演の大多数は骨粗鬆症に関するものであり、入局当初の出会いに感謝するとともに教授就任後にたくさんの方の骨粗鬆症治療薬が上市されたというタイミングにも感謝するばかりです。大学の管理・運営面においては、2013年10月から2019年9月まで三重大学医学部附属病院副病院長を拝命するとともに、2020年4月から2022年3月まで三重大学大学院医学系研究科長・医学部長を務めさせて頂きました。医学部長時代は、就任当初より新型コロナウイルス感染症の拡大が始まり、様々な制約とともに窮屈な毎日を過ごすことになりました。加えて、医学部職員や学生の逮捕、学生の懲戒問題など良からぬ出来事が複数発生するとともに教授会でも幾度となく紛糾する事案が発生するなど、大きなストレスを感じておりました。ただ、在任中に循環器腎臓内科学、血液腫瘍内科学、呼吸器

代謝内分泌内科学、消化器内科学の内科4講座に加えて消化管小児外科学、法医法科学、修復再生病理学、新しい麻酔科学など多くの教授選に携わることができ、いずれも素晴らしい人材に就任して頂くことができたと考えております。今後は実家のある桑名市に開設された医療法人尚徳会ヨナハ丘の上病院に赴任することになります。両親の介護をしつつ、地域の皆さまに寄り添った医療を

提供したいと考えております。人に恵まれ、健康に恵まれ、チャンスに恵まれ、タイミングに恵まれた幸せな大学生活でした。本当に多くの方々からご指導・ご鞭撻・ご協力を頂き、14年6ヵ月にわたる教授生活を無事に終えることができました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。最後になりましたが、三重大学医学部の益々のご発展を祈念しております。

退職のご挨拶

看護学専攻基盤看護学領域看護教育学分野 林 智子

2010年9月に医学部看護学科基礎看護学の教授として着任し、2024年3月に定年を迎え退職いたしました。13年7か月と長きにわたり大変お世話になり、心より感謝申し上げます。

着任当時、私の大学院の所属は実践基礎看護学分野でしたが、2012年4月に看護教育学分野が立ち上がり、所属が変更となりました。私自身の専門分野が大学院の分野となったことは、望外の喜びでした。これには、同じ専門分野をもつ准教授がいてくれたことが大きかったと思います。その後、2016年には看護学専攻に博士後期課程が開設され、そこでも看護教育学分野が設置されました。そのため、私たちは大学院生の指導に多くの時間と労力をつぎ込んできました。その結果、修士課程・博士前期課程では17名、博士後期課程では2名の修了生を輩出しました。さらに、2022年からは博士前期課程に看護教育学上級実践者コース（CNEコース：Clinical Nurse Educator Course）が始まりました。現在、2名の大学院生がCNEコースに在籍中ですので、修了後の活躍を期待しています。

また、在任中の大きな出来事としては、コロナ禍での学生への対応です。医学部の対応として医

学部の教務委員長の支援を受け、看護学科の教務委員長の素早い対応により、Zoomを使ったオンライン授業への早期の切り替えができ、授業が滞ることなく実施できたことは奇跡的でした。その後、学生に感染の拡大が起こったときには、執行部での連日のミーティングを行ったり、学生に対するタウンミーティングを実施したり、看護学科に対しての多くのご支援を賜りました。そして、このような緊急事態の中で、危機管理や危機対応について多くのことを学ばせていただくことができました。さらに、コロナ禍で多くの大学が臨地実習を縮小せざるをえなかった中、医学部附属病院での看護学科の実習は殆ど通常に近い状態で実施できました。これもひとえに病院長・看護部長を始め、附属病院の方々のご厚情によるものと感謝申し上げます。

最後になりましたが、三重大学大学院医学系研究科の益々のご発展を祈念して、お礼のご挨拶とさせていただきます。長い間、ありがとうございました。



退任ご挨拶

医学医療教育学 堀 浩 樹

2024年3月31日をもちまして医学部医学・看護学教育センター長ならびに大学院医学系研究科医学医療教育学分野教授を退任いたしました。医学部関係者のみなさまには、ご指導ご支援をいただき心から感謝申し上げます。

私は1984年に三重大学医学部医学科を卒業しました。その後、数年間の海外での国際医療協力と研究留学の期間を含め40年にわたり三重大学と三重大学が関係する医療機関・教育研究機関でお世話になりました。医学科卒業後すぐに小児科医を志ざし、恩師の櫻井 實教授への挨拶時には地域医療に貢献できる小児科医を目指したいと話したことを覚えています。しかし、その後のキャリアは目指した方向に沿っているとは言い難く、小児がんを専門とする医師として小児がんの診療、基礎医学研究と多施設共同臨床研究、さらには小児がん患児とその家族への社会支援活動へと進んでいきました。また、国際協力機構（JICA）の医療専門家としてガーナとタンザニアに派遣されたりもしました。1990年代後半に小児科での教育・研修を担当し始めたころから、国内での医学教育改革の流れが大きくなり、その流れに巻き込まれていきました。気が付けば医学・看護学教育センター長の立場で、三重大学医学部での教育の向上に取り組むことになっていました。教育センターでは、COVID-19パンデミックによる教育活動の制限などの多くの苦難を乗り越えながら、なんとか退任の日を迎えることになりました。

医学・看護学教育センター長としては14年余りの在任でした。そのあいだでの大きな教育カリキュラム上の進展は、日本で最も多くの医学科学学生が海外の病院での臨床実習に参加するプログラ

ムを確立し、三重県下全29市町で看護学科と医学科の学生がともに学ぶ地域保健医療の実習を導入したことででしょうか。また、新しい地域枠入学者選抜制度導入に伴う地域枠学生の指導、国家試験合格率の向上を目指した学生支援、医学教育分野別評価の受審なども担当しました。

医学教育モデル・コア・カリキュラムや医学教育分野別評価などにより、いまの医学部には、標準化された教育の実践と厳正な学修成果の評価が求められています。卒業時の能力の質保証と医学部としての社会への説明責任という観点からは、これらの取組みには意義があると思います。一方、教員の質的な向上と量的な充足を伴わない教育改革では教員の教育と学生の学修の負担が増大し、教員と学生双方に余裕がなくなってしまう。それが教育における創造性や学修者の自律性を損なうことに繋がっているように感じています。教員は、授業の前年踏襲を良しとし旧来型の教育方略を漫然と継続する、学生は先輩から授業資料を譲り受け試験前に過去問だけをやる、という状況に人材育成の発展性を見出すことはできません。新しい医学・医療を創造していく気概のある人材、社会の変化に敏感に対応できる適応力のある人材を育てていくには、医学教育を実践する教員組織の構造的改革と学生の意識改革が必要であるように思います。

それらの改革の担い手として、将来の指導者である学生、研修医、若い教職員に期待します。この“若い”の意味は、年齢ではありません。経験豊かなベテラン教職員であっても思考や行動のパラダイムシフトを実行する若々しさが大切であると思います。高等教育機関がその社会的価値を高

めていくためには、社会から必要とされる人材を育成し、教育研究活動の成果を社会に示していくことが求められます。三重大学医学部が社会から期待され、社会からの要望に応え、社会に求めら

れる医学部となるための教育研究活動の進化を医学部構成員のみなさまに託したいと思います。三重大学医学部の発展と関係者のみなさまの活躍を願って、私の退任のご挨拶とさせていただきます。

退職のご挨拶

三重大学大学院医学系研究科 環境分子医学 村田 真理子



1984年3月に三重大学医学部を卒業し、早いもので40年が経ちました。2006年12月に教授を拝命してから退職までの17年4ヶ月も振り返ってみればアツという

間と感じています。3年次の「社会と医学」の衛生学では、宿主（ヒト）と環境の相互作用による健康や疾病の成り立ちについて講義と実習を行いました。研究室研修では、より個別に親しく学生さんたちと接することができ、ゼミ室で行う歓送迎会では楽しく盛り上がりました。

2009年より、国際推薦制度（協定校からの留学生に医学系研究科から奨学金を支給）が始まり、当講座と共同研究している中国広西医科大学から大学院博士課程に計8名が入学、4年間で三重大で過ごし、多くの研究成果をあげました。また、文部科学省の国費優先配置特別プログラムにより、バングラデシュとタイからも留学生が来て、日本人の学生・大学院生と交流し、国際色豊かな教室風景になりました。しかし、コロナ禍では、2020年秋に修了した大学院生が中国に帰国するのに高額な航空券しか取れず、検疫のためにホテルで缶詰になったりと大変でした。2019年秋に入学した留学生は学会発表がオンラインばかりでしたが、2022年秋からようやく現地で参加でき、三重以外の日本も知ることができ、喜んでいました。私自

身は留学の機会に恵まれませんでした。外国で生活してみることは、学部学生や大学院生の皆さんには得難い経験になると思います。そのようなチャンスが巡ってきたときには、是非、積極的に挑戦してくださいね。

2019-2020年度は三重大学評議員、2021-2023年度は三重大学副学長（広報・ダイバーシティ推進担当）として、全学での役職を与えていただきました。医学部・医学系研究科とは一味異なる文化（?）をもつ全学の「景色」をみることができ、視野が広がったように感じました。ダイバーシティ・インクルージョン推進には、学生・若手、女性、外国人など多様な人々が大学の意思決定機関に参加できる機会が増えることが必要です。私が教授に就任した当時、医学科の教授で女性は私一人でしたが、現在は、基礎系にも臨床系にも複数の女性教授がおられます。ジェンダーのみならず、いろいろな視点から意見がでて、議論ができることが組織のフレキシビリティを上げ、大きな力を発揮することができます。医学部・医学系研究科においても、すべての構成員が個々の個性と能力が最大限発揮できることを願っています。

皆様の暖かいご支援により、無事定年を迎えることができました。厚く御礼申し上げます。今後、益々、三重大学医学系研究科が発展することをお祈りいたします。

着任のご挨拶

乳腺センター 河 口 浩 介



2024年1月1日付にて三重大学医学部 附属病院 乳腺センターの教授を拝命しました河口浩介と申します。これからの三重大学並びに三重県における乳腺診

療・研究・教育に貢献すべく取り組んで参りますので何卒よろしくお願い申し上げます。私は三重県伊勢市の出身で、三重中学校・高等学校を卒業しております。このような形で生まれ育った故郷に戻る機会を頂いたことに深く感謝を致します。

これまでの経歴ですが、医師免許取得後に日本赤十字社和歌山医療センター・大阪赤十字病院・京都大学にて外科及び乳腺外科医として研修を積みさせて頂きました。当時関西には乳腺のみを専門とする医師が非常に少なかったため、乳腺専門でこの先のキャリアを形成することに周囲から非常に珍しがられました。その後京都大学の大学院に入学し、腫瘍免疫の研究に励みました。大学院入学時に免疫チェックポイント阻害薬がトレンドになり始めた頃であり、非常に良いタイミングで良い研究生活を送れたと思っています。

研究面におきましては、医学生時代から留学に非常に興味が有り、しつこくインタビューを受けに行かせていただき、ハーバード医科大学・マサチューセッツ総合病院の腫瘍生物学講座Rakesh Jain博士の研究室に留学することができました。Jain先生は腫瘍免疫微小環境研究において世界をリードする先生でしたので、留学2年間はひたすら寝る間も惜しんでマウスとヒトの腫瘍免疫微小環境の解析を行いました。乳がんにおける運動と食事が腫瘍免疫微小環境に与える影響や、がんの

新規武装抗体開発、一酸化窒素が腫瘍免疫微小環境に与える影響など、がん種横断的に取り組むことができました。

留学後、京都大学に帰学してからは、留学時代に身につけた*in vitro*, *in vivo*実験を中心に大学院生と共に乳がんの腫瘍免疫微小環境研究に取り組みました。また、臨床試験グループにおいてトランスレーショナル研究を担当し、研究代表として産学連携での研究を進めてまいりました。また、京都大学・協力施設における乳癌組織・臨床情報バイオデータバンクの設立・運営に主体的に携わってきました。現在では5,000症例以上の規模となり、国内外の横断的な研究体制の基礎となっています。今後は、三重大学においても組織バンクの利点と欠点双方を経験している観点から、より利便的で柔軟性のある乳癌組織・臨床情報バイオデータバンクの構築と整備に貢献ができればと思っています。

診療体制については地域医療と大学の連携を推進し、高い水準の治療を地域に根ざした形で提供することを目指します。三重大学医学部附属病院乳腺センターでは、初代教授である小川教授のもとで整容性の高い手術手技が確立されており、その実績を活かしながら、今後は集学的治療における地域医療と大学の連携推進に注力したいと考えています。患者さんにとって最善の治療が提供されるよう、大学病院としての役割を果たしていくことに全力を尽くしたいと考えています。

研究、教育、臨床の各分野でのこれらの取り組みを通じて、大学病院が地域医療において中心的な役割を果たし、国内外の研究者や医療従事者と連携して、乳がん治療をはじめとする患者の予後

や生活の質の向上に貢献できることを目指します。そして、これらの取り組みを広く社会に発信し、他の地域や病院にも参考となるようなモデルケースを提供することで、県内のみならず全国的な乳

腺医療の質向上に貢献していきたいと考えていますので、どうぞご助力ご指導の程何卒よろしくお願い申し上げます。

着任のご挨拶

三重大学大学院医学系研究科 公衆衛生・産業医学分野 神谷 元



2024年2月1日付で、三重大学大学院医学系研究科 公衆衛生・産業医学分野の教授に着任いたしました神谷元と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

25年ぶりに母校に戻って参りました。学生時代に真っ黒になりながらボールを追いかけた精神科テニスコートや暗くなるまで友人たちと語り明かした医水グラウンドが無くなっている衝撃や、新しい附属病院に感激するなど、完全に浦島太郎状態ですが、それでも学生時代にお世話になった先生方や同級生、後輩の皆さんの顔を拝見すると母校に戻ってきたことを実感いたします。

私自身はこれまで感染症疫学（特に実地疫学）や予防接種を中心に研究、活動してまいりましたが、それは公衆衛生・産業医学分野がカバーする領域のほんのごく一部です。当講座のスタッフはもちろんのこと、医学部の他の講座のみなさま、そして総合大学である三重大学のメリットを生かして、他学部の皆様とも幅広く協力して研究等に励んでいきたいと考えております。

このほか、兼任として公衆衛生・感染症危機管理学講座の教授も拝命しております。この講座はCOVID-19パンデミック対応の経験から、公衆衛生、社会医学分野で活躍する人材育成を目的として、三重県から寄付をいただいている講座となり

ます。COVID-19パンデミック対応は、全世界で困難を極め、多くの命が奪われ、同時にアウトブレイク対応をした人たちにも大きな傷跡を残しました。今回の教訓を生かし、次いつ発生するかわからないパンデミックに向けて三重の地を感染症に強い地域にしていきたいと強く思っております。そのためには、平時からの顔の見える関係の構築、公衆衛生や社会医学に関心を持つ人材の育成、そして緊急時にはお互いが協力し合って困難に立ち向かう意識の統一が大切だと考えます。これから、様々な場面でお会いする機会があるかと存じますが、いろいろとご教示いただければ幸いです。

25年ぶりに戻った大学、そして津の町は、変わったところもたくさんありますが、ふとした時に聞こえてくる伊勢弁と、接する人々の温かさは変わってなくて、ここに帰って来れたことを大変幸せに感じております。まだまだ若輩者ではございますが、地域の公衆衛生の強化と発展のために、スタッフとともに精一杯取り組んでいく所存です。温かいご指導とご鞭撻のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



トピックス

第82回日本癌学会学術総会JCA若手研究者ポスター賞ならびに 日本患者由来がんモデル学会学術集会2023ポスター賞受賞のご報告

三重大大学 腎泌尿器外科 杉野友亮

このたび私は2023年9月21日から23日に開催された第82回日本癌学会（パシフィコ横浜）でJCA若手研究者ポスター賞を、そして2023年10月24日から25日に開催された日本患者由来がんモデル学会学術集会2023（国立がん研究センター）でポスター賞を受賞することができましたので、合わせてご報告させていただきます。

私は2020年に大学院に進学し、基礎研究の道へと進みました。4年間臨床の現場を離れて研究に専念するというありがたい機会を頂戴し、このたびこのような成果をご報告できることを大変嬉しく思います。2019年11月に井上貴博教授がご着任されて、大学院生としてはその第一期生であったこともあり、手探りでのスタートでしたが、多くの方々からお助けいただきこのたびの受賞報告に至りました。

今回の2つの学会で発表させていただいた演題は、私の研究テーマである「筋層浸潤性膀胱癌に対する術前化学療法の効果予測を目指したゼブラフィッシュ異種移植モデルの開発」についてのものです。筋層浸潤性膀胱癌患者の標準治療はシスプラチンベースの術前化学療法後の膀胱全摘除術ですが、術前化学療法の奏効率は40%程度にとどまり、依然としてその予後は不良です。術前化学療法後に膀胱全摘除術を行っても術後すぐに再発してしまったり、術前化学療法中に疾患が進行して手術が

困難となったりといったケースは泌尿器科医であれば誰しも経験いたします。近年は免疫チェックポイント阻害剤や抗体薬物複合体も膀胱癌の逐次治療においては重要な役割を担うようになっており、患者毎に有効な薬剤を見極めて治療を選択する個別化治療への期待も高まっておりますが、薬物治療の効果を予測するためのバイオマーカーはまだ確立されておらず、迅速かつ正確な予測モデルの開発が求められていました。

「術前化学療法を行う前に経尿道的膀胱腫瘍切除術で得られた組織をゼブラフィッシュに移植して、抗がん剤の薬効を判定する」。井上貴博教授からそのアイデアを初めてお聞きしたときには驚きと期待とともに多少の不安もありましたが、何より臨床に直結するテーマであることが、私のモチベーションの維持に繋がりました。ご存知の通り三重大大学はゼブラフィッシュ研究において本邦のトップランナーであり、我々の膀胱癌ゼブラ



フィッシュ異種移植モデルの確立においてもシステムズ薬理学教室の田中利男特任教授をはじめ関係者の方々には多くのご支援をいただきました。これまでの実験で我々が開発したゼブラフィッシュ異種移植モデルはシスプラチンの薬効判定においてin vitro、マウス異種移植モデルと一致した結果を得ており、今回の2つの学会ではその成果を報告させていただきました。日本癌学会学術総会では驚くほど多くのご質問をいただき、その後の日本患者由来がんモデル学会学術集会でもさらに深い議論を交わすことができました。

私は2024年4月から4年ぶりに臨床の現場に復帰いたしますが、本研究の臨床応用に向けて、研

究活動にも引き続き尽力する所存です。

末筆となりましたが、今回の受賞にあたって、手術検体を快くご提供いただいた患者様、すべての面でサポートしていただいた井上貴博教授、ならびにゼブラフィッシュ研究においてご支援をいただいた田中利男教授、主に臨床面でご協力していただいた腎泌尿器外科スタッフの先生方、その他ご指導、ご協力をいただいた多くの方々にこの場を借りて深く御礼申し上げます。今回の受賞を励みにこれからも鋭意邁進して参りますので、今後ともご指導ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第85回日本臨床外科学会総会優秀演題賞を受賞して

三重大学病院 ゲノム診療部 教授 奥 川 喜 永

日本臨床外科学会は、1937年に創設され、臨床外科学および外科医療の進歩発展を図ることを目的とし、併せて会員相互の親睦を図り、関連他学会との連携を行うことを目的に活動している学術団体です。このたび、第85回日本臨床外科学会総会において、優秀演題賞を受賞することができましたのでご報告いたします。

がんゲノム医療の本邦におけるこれまでの動きは、2015年に「ゲノム医療実現推進協議会」が設置され、2017年には厚生労働省が「がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会」を設置し、がんゲノム医療の社会実装に向けた体制の整備が始まりました。そして2019年にはがんゲノム医療の窓口となるがん遺伝子パネル検査が保険承認となり、さらにそれを実践していく医療機関としてがんゲノム医療中核拠点病院・拠点病院・連携病院が指定されました。当院も2019年から全国32施設あるがんゲノム拠点病院として、厚生労働省より指定

を受け活動をしてきました。がんゲノム医療の窓口となるがん遺伝子パネル検査は、大きく、腫瘍組織を用いるパネル検査と、血液検体のみを用いるパネル検査に区分され、それぞれのパネル検査



に一長一短が存在しますが、保険適応で提供可能なものは一生にどちらか一つとなっているため、パネル検査の選択もまた、患者様の予後改善にもつながりうる重要なポイントとなります。特に血液を用いるパネル検査には、腫瘍組織を用いるパネル検査と違い、採血のみで調べることができるメリットが存在しますが、デメリットも存在するため、安易な運用には留意が必要です。今回の学会では、その点に着目し、当院で施行してきた900例を超えるがん遺伝子パネル検査の結果を振り返り、血液を用いるパネル検査の留意点を、総会特別企画“ゲノム医療と外科医の関わり”のセッションで報告し、その成果が高く評価され、このたび本学術集会の中から10演題選ばれた優秀演題の一つとして、受賞させていただきました。

このような栄誉ある賞をいただける場に立つこ

とができたのは、ひとえに三重大学病院のさまざまな皆様のお力添えがあってこそだと深く感謝しております。ゲノム医療部の医師や事務補佐員、病理部、腫瘍内科、がん支援センター、エキスパートパネルに参加いただく各診療科の主治医の先生がたや薬剤部や看護部、他院からの情報共有をしていただく緩和ケアセンター、紹介対応を迅速に外来予約調整いただく総合サポートセンター初診受付、医事課、そして貴重な症例をご紹介いただく三重県内の主治医を含む医療従事者の方々に、この場をお借りし、深謝いたします。今後も三重大学病院の発展と三重県におけるがん患者様の治療に少しでも貢献できるよう、患者様の満足度につながるがんゲノム医療の提供を目標に頑張っていく所存ですのでご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第61回日本癌治療学会学術集会

Young Oncologist Awardを受賞して

三重大学医学部附属病院 ゲノム医療部 北 嶋 貴 仁

この度、2023年10月に開催された第61回日本癌治療学会学術集会におきまして、Young Oncologist Awardを受賞することができましたのでご報告いたします。

受賞した発表演題は、「術前化学放射線療法施行後直腸癌患者における予後予測マーカーとしてのmiR-1290の検討」です。消化管・小児外科では、これまでに大腸癌患者における術前の血清miR-1290が有用な予後・再発予測マーカーとなり得ることを報告してきました。一方で、術前化学放射線療法施行した直腸癌患者において、血清miR-1290の発現と治療効果予測や腫瘍学的予後との関連は不明でした。本研究では、術前化学放射線療法施行した直腸癌患者の治療前採血と治療後採血を用いて、血清miR-1290の発現を測定し、

直腸癌患者における治療効果予測や腫瘍学的予後との関連を検討した結果を報告しました。



結果は、術前化学放射線療法前の血清miR-1290高値群では無病生存期間において、有意に予後不良でした。さらに、無病生存期間に対する多変量解析においても、術前化学放射線療法前の血清miR-1290高値は独立した再発予測因子であり、術前化学放射線療法施行後の直腸癌患者における術後治療を選択する上での有用な指標となりえる可能性が示唆されました。

今回の検討では2010年から2020年に消化管・小児外科で治療した直腸癌患者を対象としております。今回の発表には当時から現在にかけて消化管・小児外科に関わっていただいた全ての方々の

ご尽力があつてのことと考えております。今回、受賞することができたことは大変恐縮ではございますが、これまで関係いただいた方々のご尽力が高く評価されたと大変嬉しく思っております。

最後になりますが、このような栄誉ある賞を頂きましたのは、日頃よりご指導いただいております消化管・小児外科の間山裕二教授および、ゲノム医療部の奥川喜永教授をはじめとするよき上司の先生方のご指導と、同僚・後輩をはじめとする皆様のお力添えのおかげだと思っております。この場をお借りして心より感謝を申し上げます。

三重大学病院賞を受賞して

三重大学医学部附属病院 消化管外科 川村 幹雄

このたび、「三重大学病院賞」という素晴らしい賞を賜り、大変光栄なものと心より感謝申し上げます。

私は2020年より消化管外科の大腸チームの一員として、大腸癌の集学的治療・外科治療（特にロボット支援下手術などの低侵襲手術）に従事しております。

近年、直腸癌の術前治療に放射線治療、化学療法 of どちらも行う Total neoadjuvant therapy (TNT) という治療法が登場し注目されています。TNTでは高い再発抑制効果のみならず完全奏功（腫瘍が完全に消失する）により手術そのものを回避する「臓器温存」という全く新しい概念を実現しました。三重大学消化管外科では2018年より全国で先駆けてTNTを導入し、現在まで100例を超える症例に施行しています。実に約40%の症例が完全奏功により手術を回避し、手術回避できた患者さんからは大変ご好評をいただいております。（全国的にも症例数は多い方だと思います。）

現在、国内の他の医療機関でもTNTの導入が試みられていますが、質の高い放射線治療がTNTの成否を決定するため導入は容易ではありません。三重大学においては放射線治療科の先生方、スタッフのみなさまのご努力により非常に安全性・効果の高い放射線治療が従来より提供されており、当科でもTNT導入時点から現在まで円滑、安全に運用できています。また、治療効果判定にはMRI、PET-CTの正確な読影が不可欠であります。この点においても放射線科の先生方の的確



な読影により高い質を担保していただいております。この場をお借りして、放射線科の先生方・スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。

手術面におきましては、手術支援ロボットを最大限に用いて、肛門に近い超低位直腸癌の肛門温存手術にこだわっています。肛門管の中で切離・吻合を行う超低位直腸癌手術は難易度が高いですが、さらなる手術の質の向上を目指し日々取り組んでいます。また局所切除のみで治癒が望める直腸癌に対しては腹腔鏡手術を応用して経肛門的に腫瘍の局所切除を行っています。このように、患者さんの「肛門を残してほしい」という期待に応え、かつ「根治」を目指して最適な治療を提供で

きるような努力をしております。

現在、直腸癌を中心に大腸癌の治療は急速に進化しており、もはや外科医だけでなく多くの専門科による治療連携が不可欠です。また三重大学病院は全国的にも有数の最新の手術支援ロボットを備えた大学病院であり、質の高い大腸癌外科治療を実現するには最適の環境であると実感しています。その中で大腸癌の外科治療領域・集学的治療領域において治療成績の向上、信頼される「大腸外科」を目指して大腸チームのみなとともに頑張っております。

今後とも皆様のご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

第62回日本鼻科学会総会・学術講演会で

若手優秀発表賞を受賞しました

耳鼻咽喉・頭頸部外科 乙 田 愛 美

このたび、2023年9月に三重県津市で開催されました第62回日本鼻科学会総会・学術講演会におきまして、若手優秀発表賞を頂きました。

受賞した演題は「鼻性髄液漏の漏孔閉鎖方法と成功要因の解析」です。鼻性髄液漏は、外傷や腫瘍、髄膜瘤などで硬膜損傷が生じることにより脳脊髄液が鼻内へ漏れ出す病態です。逆行性感染で髄膜炎を発症する危険性があるため、瘻孔を閉鎖する手術治療を適用します。近年は経鼻内視鏡下でより低侵襲な手術が施行されるようになり、当院でも多くの症例の手術を経鼻内視鏡下で施行しています。今回は2010年から2023年の13年間における当院での漏孔閉鎖術の成功率および要因を報告しました。当科では径10mm未満の小さな漏孔には臍部の脂肪を用いた閉鎖方法を基本として適宜有茎鼻腔粘膜弁も追加使用し、10mm以上の大きな漏孔には大腿筋膜や骨・軟骨、有茎鼻腔粘膜弁を使用した多層再建で閉鎖をしています。その結果、



22症例中22症例で一期的に閉鎖に成功し、100%の成功率でした。この結果に基づいて、漏孔閉鎖率向上のためには漏孔の大きさに応じて適切な閉鎖材料を選択することが重要と考察し、それを発

表した結果、本賞を頂きました。

今回の発表は三重大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科において、内視鏡下鼻副鼻腔手術を手掛けて来られた多くの先生方のご尽力、功績があつてのものです。その成果を私が代表して受賞したことに大変恐縮しておりますが、それと同時に三重大学の手術方法やその素晴らしい成績を報告することができ、認められたことをとても嬉しく思っております。今後は論文執筆に励んでいくつもりです。

最後に、いつも親身になって手術や発表のご指導を下さります小林正佳准教授、ならびに、データ集めから発表まで今回の発表の一連をご指導頂きました森下裕之先生、学会発表の機会を与えてくださり、平素よりたくさんご指導、ご鞭撻下さります竹内万彦教授、その他たくさんのご指導を下さります耳鼻咽喉科・頭頸部外科の先生方にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。

ORS 2024 tendon section podium award を受賞して

三重大学医学部整形外科 藤 川 祐 基

この度、2024年2月にカリフォルニア州のロングビーチで開催されたOrthopaedic Research Society (ORS) にて、表題のawardをいただきましたので、この場をお借りしてご報告申し上げます。

こちらの学会は、整形外科領域の基礎研究に関する学会で、世界中から集まった整形外科医があらゆる領域の報告を行います。三重大学整形外科では、毎年大学院生を中心に積極的に演題登録しております。



発表内容は、「The effects of Fibroblast Growth Factor-2 (FGF-2) on Achilles tendon injury」という表題で、ラットのアキレス腱に欠損部を作

成し、そちらにFGF-2を含有したゼラチンハイドロゲルを充填した状態で縫合することで、FGF-2が腱細胞に与える影響について研究したものです。

前年度のORS 2023にも同内容で演題登録したところポスター発表で採択され、その際にもposter awardを受賞したのですが、この度は1年間の追加研究が評価されて、podium (oral) として採択され、結果的にawardまで受賞することができました。

私が受賞したtendon sectionのように、整形外科領域の分野ごとに5、6個のsectionに分けられ



ており、poster awardとpodium awardを受賞したのは三重大大学整形外科では初めてのことでした。

残念ながら学会期間中のカリフォルニア州は、嵐に襲われている期間であり特に観光などもできませんでしたが、会場内では外国の先生方と交流することもでき、有意義な学会参加となりました。

最後になりましたが、本研究を実施するにあたり、日頃からご指導いただいております須藤教授を初め、足・スポーツ班の上司である西村先生、千賀先生、三重大大学整形外科の先生方にこの場をお借りして深謝申し上げます。

第62回 日本臨床検査医学会東海・北陸支部総会、 第346回 日本臨床化学会東海・北陸支部例会 連合大会 (テーマ：感染症、備えよ常にー臨床検査の責務ー) 開催のご報告

三重大大学大学院医学系研究科腫瘍病理・医学部附属病院病理部・バイオバンクセンター 渡 邊 昌 俊
三重大大学医学部附属病院検査部・感染制御部 田 辺 正 樹



写真1. 野阪哲哉教授の特別講演

新年に発生した「能登半島地震」は、石川県、富山県などに甚大な被害をもたらしました。また、日本臨床検査医学会東海・北陸支部ならびに日本臨床化学会東海・北陸支部の会員、施設にも大きな被害をもたらしました。このような状況の中、2024年3月2日(土)に、アストプラザ(アスト津)で、第62回 日本臨床検査医学会東海・北陸支部総会、第346回 日本臨床化学会東海・北陸支部例会 連合大会(大会長：渡邊)を無事開催できたことをご報告いたします。2020年から始まった新型コロナウイルスパンデミックは、我々の生活に様々な影響を及ぼしました。本連合大会もコロナ禍以降、WEBでの開催が続いていましたが、

新型コロナの5類移行を受け、今回数年ぶりに対面で開催することができました。

感染症パンデミックや災害発生時における感染症の流行を目の当たりにし、日々の感染症対策の重要性が改めて認識されています。また、このような感染症危機の経験は、感染対策や治療に加え、臨床検査の重要性を浮き彫りにしました。新



写真2. 宮城悦子教授の教育講演

型コロナ発生当初は、日本の検査体制が十分でなく、諸外国と比較し、検査不足が指摘されましたが、その後、全自動核酸検査機器の普及、抗原定量検査・抗原定性検査の導入などにより、検査が身近なものとなりました。今回のパンデミック対応の経験をもとに、次の感染症危機に、我々は何を準備し、いかに対峙するかが問われているところです。

そこで、本連合会では、「感染症、備えよ常に－臨床検査の責務－」をテーマに掲げ、特別講演、教育講演、シンポジウムを企画いたしました。「備えよ常に」はボーイスカウトの標語で、「さあこい、準備はできている」という意味で、新型コロナパンデミックへの対応を振り返り、テーマといたしました。特別講演として（座長：登勉名誉教授）、三重大学大学院医学系研究科感染制御医学・分子遺伝学分野の野阪哲哉教授より「感染症における免疫学的検査と新規モダリティワクチン開発」というタイトルで、バイオコモ株式会社と共同開発された非増殖型パラインフルエンザ2型ウイルスベクターを用いた経鼻型ワクチンの可能性などを含めたワクチン先端技術の話をお聞かせいただきました。教育講演（座長：渡邊）は、「HPVワクチンとHPV検査の課題と展望」で、横浜市立大学大学院医学系研究科・生殖生育病態医学の宮城悦子教授にHPVを中心に検診、ワクチンおよび女性医師の働き方などについて、熱くご講演いただきました。シンポジウム（座長：田辺）は「ポストコロナ時代の感染症検査の展望」というテーマで、新型コロナパンデミックにおける検査を主体とした現場の対応と今後について3名の演者にご講演いただきました。長崎大学病院の太田賢治



写真3. 終了後のスタッフ集合写真

先生からは、新型コロナパンデミック時における医療機関での検査の実際や課題を通じ、次の感染症危機への備えについてお話をいただきました。京都府保健環境研究所の藤田直久先生からは、地方衛生研究所における新型コロナ対応について、全ゲノム解析による流行状況の把握や、新規検査技術の他の感染症への応用についてお話をいただきました。国立病院機構三重病院の谷口清州先生からは、新型コロナパンデミック対応を受け、今後の日本の感染症サーベイランスの方向性についてお話をいただきました。新型コロナ対応を中心に感染症検査について、著名な先生方より様々な視点でお話をいただき、日本の課題や今後の検査体制について考える良い機会となりました。また、一般演題も附属病院、県内外の大学・病院より16題の応募をいただき、小さな大会ながら、活発に議論をいただきました。

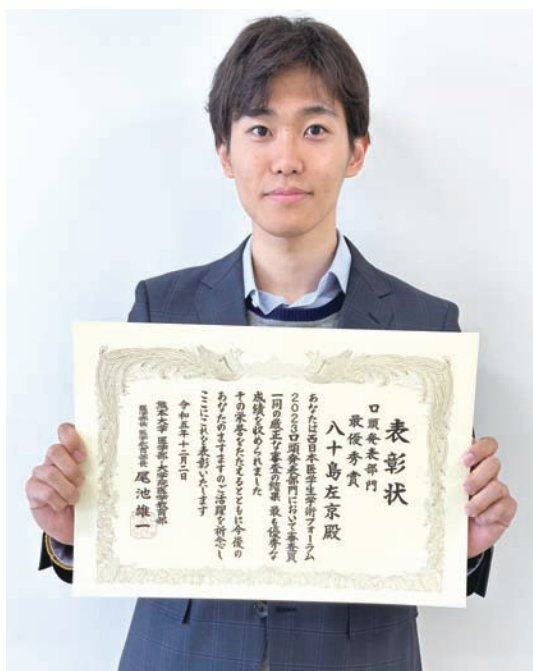
大会の準備および開催にご協力いただいた附属病院検査部、病理部、輸血・細胞治療部、腫瘍病理、修復再生病理の皆様にご感謝いたします。



第8回西日本医学生学術フォーラム

審査員口頭発表部門 最優秀賞を受賞して

統合薬理学 八十島 左 京



この度、2023年12月2日（土）に熊本県医師会館（熊本市）にて開催されました第8回西日本医学生学術フォーラムにおいて審査員口頭発表部門最優秀賞をいただきましたので、謹んでご報告を申し上げます。演題名「Snijders Blok-Campeau症候群モデルゼブラフィッシュを用いた行動解析と治療薬探索」

西日本医学生学術フォーラムは、研究志向のある医学生が熱意ある指導教員とともに集い、日頃の研究成果を紹介し、ディスカッションし、親交を深める研究集会です。医学生の研究への意欲と能力を高め、将来の医学研究の担い手を育成するとともに、研究マインドを有する志高い臨床医の養成を目的としています。また、医学研究者を目指す学生とその養成を行う教員・研究者相互の情報交流の推進と親善の深化も意図しています [1]。フォーラム中は多数の素晴らしい演題と発表とともに、双方向的な活発な議論が展開され、その中

で新たな発見や気づきもあり、私にとって大変勉強になるとともに、貴重な経験になりました。特に、九州地方では初開催ということもあり、熊本大学、大分大学、佐賀大学、産業医科大学、久留米大学などの優秀な学生の皆さん、熱意ある先生方と新しく知己になれたことは自身の視野をさらに広げるきっかけになったと同時に、共に意識を高め合いながら研究活動を前へ進めるための良い刺激を得ることができました。

以下に研究内容について簡単にご紹介申し上げます。

本研究では、神奈川県立子ども医療センターのSnijders Blok-Campeau症候群（以下本症）患者5名の臨床情報をもとにモデルゼブラフィッシュを作成し、その行動解析を基盤とする網羅的な解析を行うことで治療薬探索を行いました。本症はCHD3遺伝子変異によって引き起こされ、知的障害、学習障害、注意欠陥・多動障害、自閉スペクトラム障害といった複合的な病態を呈します。本研究ではCRISPR/Cas9システムを用いてモデルゼブラフィッシュを作成し、その行動を解析した結果、過剰な社会性 hyper-sociabilityと低い攻撃性 hypo-aggressiveness を有していることが見出されました。これは実際の患者においても確認され、臨床表現型がモデルゼブラフィッシュにおいて再現されていることが明らかになりました。また、ゼブラフィッシュから脳組織を抽出してメタボローム解析を行うことでミトコンドリア機能異常が示唆され、治療薬としてミトコンドリアを標的とする薬物（メトホルミン）を見出しました。これをゼブラフィッシュに投与して行動解析を行った結果、その行動異常の一部が改善されまし

た。これらの結果から、メトホルミンは本症の治療薬となりうる可能性が見出されました。

私は本学医学部医学科3年生であり、1年次より西村有平教授が主宰される統合薬理学講座にて新医学専攻コースに在籍する学生として活動をさせていただいております。今回の臨床情報を元にしたモデル動物の作成、モデル動物の行動解析、モデル動物表現型と患者表現型との比較、網羅的解析による治療薬探索という一連の経験は、基礎から臨床へのダイナミックなつながりを感じさせるとともに、医学研究の面白さを再確認することにつながり、私にとって大変貴重なものになりました。特に、自分が行っていることが将来の患者さんへフィードバックされ、新しい治療法確立に寄与できる可能性を秘めていることをいつも以上に感じながら研究に取り組めたことは何ものにも

代え難い喜びでした。本受賞を励みに日々の研究活動や勉学により一層精進して参ります。

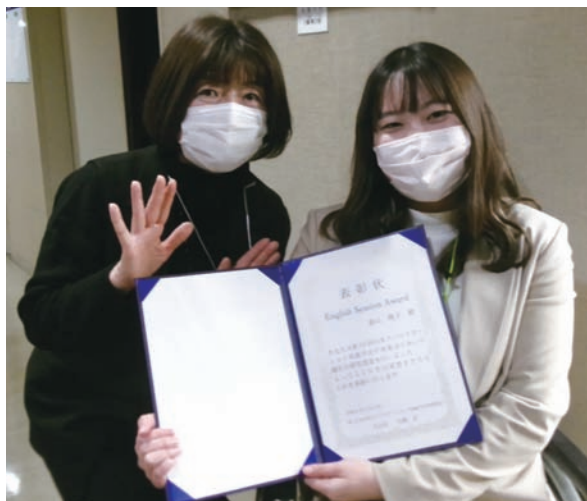
最後に、本研究にご協力いただきました患者様とご家族様に深い敬意と感謝を申し上げますとともに、本受賞に際しご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学講座の方々、共同研究者の黒澤健司先生をはじめとする神奈川県立こども医療センターの方々、日頃支えてくれている友人、先輩、後輩、家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

参考URL

1. <https://www.m.ehime-u.ac.jp/sfmswj/>

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会 English session awardを受賞して

リハビリテーション医学 遠山桃子



第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会が2024年3月2日、四日市市文化会館にて開催され、その中でEnglish session awardを受賞しましたので、報告させていただきます。受賞演

題はHemoglobin-Geriatric Nutritional Risk Index predicts hospitalization-associated disability in older heart failure patientsと題し、高齢心不全患者を対象にH-GNRIを用いた入院関連能力障害発症の予測精度を検証したものです。高齢者が増加しており、入院に伴ってADLが低下する患者が増えております。低栄養は入院関連能力障害の重要なリスク因子であり、早期にリスク評価ができれば早期対応が可能となると考えております。最後に、日々ご指導頂いている百崎教授をはじめ、多くの面でサポート頂いております大学院の方々、この場を借りて御礼申し上げます。今後も研鑽を積んでいく所存ですので、引き続きのご指導・ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会 ポスター優秀演題賞を受賞して

看護学専攻 実践看護学領域 成人看護学分野 船尾 浩貴



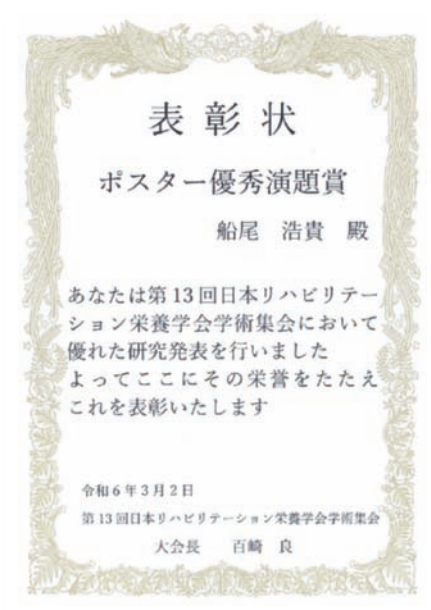
この度、2024年3月2日に四日市市文化会館（三重県四日市市）で開催されました第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会において、ポスター優秀演題賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。こちらの学術集会は、リハビリテーション医学講座の百崎良教授が大会長を務められ、テーマは「デジタルヘルス時代のリハビリテーション栄養」でした。開催形態は現地およびオンデマンド配信とされ、またポストコンGRESSセミナーはメタバースで行われ、多くの参加者が交流される機会となりました。

今回、私が受賞した発表演題は「バーチャルリアリティ（VR）を利用した訪問リハビリテーションによる疼痛緩和効果－慢性疼痛患者を対象とした前後比較試験－」です。慢性疼痛は3ヶ月以上持続または再発する痛みと定義され、身体・心理・社会的要因が関与することで、その病態は複雑化しています。特に要介護状態にある在宅患者が抱える慢性疼痛は、長期療養生活による心理社会的要因が影響することでさらに難治化しており、効果的なりハビリテーションが阻害されています。近年、VRを利用したリハビリテーションによる疼痛緩和や身体機能改善効果が報告されています

が、医療施設内のものが中心であり、在宅分野での報告は限られています。本研究は、在宅療養する慢性疼痛患者を対象としてVRを利用した訪問リハビリテーションを中期的に施行し、前後比較からその実行可能性を検証するものです。学術集会発表時点での症例数は限られており、その限界は大きいものですが、リハビリ施行中の疼痛緩和について、いくつか有意義な所見がみられました。

ポスター発表の場ではコミュニケーションアワーを設けていただき、多専門分野の先生方と意見交換を行うことで、新たな知見や深い学びを得ることができました。

本研究はまだ実行可能性を検証する段階にありますので、今後も症例数を増やしていくことで、研究の成果を報告できるよう尽力してまいります。最後に、本学術集会で優秀賞にご選出いただくにあたり、研究にご参加いただいた皆様、研究協力施設職員の皆様、ご指導賜りました先生方に厚く御礼を申し上げます。



第144回日本薬理学会近畿部会優秀発表賞を受賞して

統合薬理学 大 瀧 翔 太



この度、2024年3月20日に大阪医科薬科大学にて開催されました第144回日本薬理学会近畿部会において、「ランソプラゾールはイソニアジドによる肝障害を軽減する」という演題で優秀発表賞を賜りましたので、ご報告させていただきます。以下に研究内容についてご紹介させていただきます。

イソニアジドは結核の治療薬として使われますが、重篤な肝障害を引き起こす可能性があります。現状ではイソニアジド誘発性肝障害を予防できる、エビデンスレベルの高い治療薬は確立されていません。そこで、本研究ではイソニアジド誘発性肝障害を軽減する併用薬の同定を試みました。最初に、さまざまなマウス系統におけるイソニアジド感受性の違いを解析した公共トランスクリプトームデータを起点として、イソニアジド誘発性肝障害に関連する遺伝子発現パターンであるシグネチャーを同定しました。この遺伝子発現シグネチャーをConnectivity Mapと呼ばれるデータベースに入力し、肝障害を軽減し得る薬物を同定しました。また、ヒト有害事象自発報告データ

ベースを用いて、Connectivity mapとは異なる方法で肝障害を軽減し得る薬物を同定しました。これら2つのデータベースで同定された薬物のリストを照らし合わせたところ、プロトンポンプ阻害薬であるランソプラゾールが共通して予測されました。次に、ゼブラフィッシュを用いた検証により、予測されたランソプラゾールがイソニアジドによる肝細胞アポトーシスを抑制し、小胞体ストレスや炎症を軽減する可能性が示唆されました。最後に、三重大学病院の電子カルテ情報を用いて、イソニアジドを投与された患者における肝機能をランソプラゾール内服群と非内服群で比較したところ、内服群の肝逸脱酵素が非内服群に比べて有意に低いことが確認されました。これらの結果は、ランソプラゾールがイソニアジド誘発性肝障害を軽減することを示唆しています。この研究手法は、他の薬物性肝障害に対する治療薬の探索にも活用できると考えられます。

私は医学部医学科の4年生であり、医学科のカリキュラムである研究室研修を通じて、西村有平教授の主宰される統合薬理研究室に所属し、活動をさせていただいております。日々の研究活動の積み重ねが、学会発表にて表彰していただくという形で実を結び、大変有り難く貴重な経験をさせていただいたと感じております。この経験を糧に、今後も研究活動や勉学により一層精進してまいります。

最後に、受賞に際しましてご指導を賜りました西村有平教授、白水崇助教をはじめとする統合薬理学分野の皆様、臨床研究発センターの田丸智巳教授、日頃から支えてくれた友人や家族にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

学会だより

第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会開催

リハビリテーション部 百 崎 良



2024年3月2日、第13回日本リハビリテーション栄養学会学術集会を四日市市文化会館にて開催いたしました。現在、様々な分野でデジタルヘルステクノロジーの活用が進んでおり、本学会でもこのあたりをトピックとしてとりあげたいと考え、学術集会のテーマを「デジタルヘルス時代のリハビリテーション栄養」とさせて頂きました。モバイルヘルスを活用したリハビリテーションや栄養管理、デジタルヘルステクノロジーを活用したフレイル対策など6つの特別講演、24の教育講演を行いました。また、サルコペニア・フレイル学会、老年医学会、臨床栄養代謝学会等、10の団体にご協力頂きながらジョイントシンポジウムを行

いました。久しぶりの現地開催ということもあり、900名近くの方がご参加されました。また、バーチャルリハビリテーション栄養学会を3月10日、メタバースにて開催しました。脳卒中患者の栄養管理、心不全アプリ、リハビリテーション患者の薬剤管理、メタバース医療教育、医療ブロックチェーン、アバターワークの講演などを行い、最後にAIアートコンテストを行いました。こちらは、600名近くの方がご参加されました。メタバースならではのインタラクティブなイベントを開催することができ、参加者の満足度も高かったのではないかと思います。高齢者が増え、サルコペニアやフレイルを有する方々が増えており、今後リハ



ビリテーションと栄養管理の重要性はますます、
高まっていくことが予想されます。是非、多くの

方々にこの重要性を認識して頂けたらと思います。



特集「黒潮医療人養成プロジェクト第2回合同シンポジウム」

序 文

三重大学大学院医学系研究科 統合薬理学分野 西 村 有 平

2024年3月2日、三重大学地域イノベーションホールにて、黒潮医療人養成プロジェクト第2回合同シンポジウムが開催されました。黒潮医療人養成プロジェクトは、文部科学省「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」の一環として2022年に採択されました。三重大学、和歌山県立医科大学、高知大学は、太平洋に面して長い海岸線を有する県に立地しており、南海トラフ地震などによる災害・救急医療や、県中心部より遠隔地において進展する過疎高齢化に対する総合診療などの地域ニーズを共有しています。本プロジェクトはこれらのニーズに対応できる「黒潮医療人」の養成を目標とする7年間の事業です。毎年度末に三重大学合同シンポジウムを持ち回りで開催することになっています。事業2年目となる今年度の合同シンポジウムは三重大学医学部が主催し、177人（現地86人、オンライン91人）のご参加をいただきました。177人の内訳は、医学生 87名、大学教職員 56名、高校生 12名、地域医療機関職員 9名、県庁職員 3名、その他 10名でした。医学部長の堀 浩樹先生、学長の伊藤 正明先生より開会のご挨拶をいただいた後、三重県知事の一見勝之 様からご祝辞を賜りました。その後、日本WHO協会理事長の中村 安秀先生と、富山大学医学教育学講座教授の高村 昭輝先生による特別講演2題（座長は堀先生と、総合診療部教授の山本憲彦先生）、本学医学部学生（岸上 僚一君、森井

啓太君、村瀬 翔来君、中西 なつみさん、水谷 友香さん）と救命救急・総合集中治療センター教授の鈴木 圭先生による取り組み事例報告3題、災害対策推進・教育センター長の岸和田 昌之先生を中心とするグループディスカッションが行われました。88名の参加者（医学生 50名、大学教職員 26名、高校生 10名、地域医療機関職員 2名）からシンポジウム後のアンケートに対する回答が得られ、本シンポジウムに対する高い満足度が明らかとなりました。

本特集では、岸和田先生にグループディスカッションと医学部学生による取り組み事例について、鈴木先生にER教育システムに関する取り組みについて、山本先生に高村先生の特別講演についてご報告いただきます。また、岸和田先生には合同シンポジウムの前日に開催された施設見学ツアーと懇親会についてもご報告いただきます。

天気にも恵まれ、充実した2日間を過ごすことができました。病院長の池田 智明先生、三重県医療保健部医療人材課課長の栗田 晃秀様、町立南伊勢病院院長の山添 尚久先生はじめご参加いただきました皆様、シンポジウムのご後援を賜りました三重県、公益社団法人三重県医師会、一般社団法人三重県病院協会の皆様、三重大学連携校事業推進委員会（*）の皆様、そして準備から実施に至るまで献身的にご支援いただいた本学事務方の皆様に心より感謝申し上げます。

*三重大学連携校事業推進委員会（令和5年度）：
池山 陽登、伊藤 圭一、内堀 善有、岸和田 昌
之、鈴木 圭、鈴木 孝明、成田 正明、西村 有

平、堀 浩樹、松岡 真理、水野 修吾、宮崎 洸匠、
宮島 真悟、宮園 翔伍、森尾 邦正、森本 茉鈴、
山本 憲彦、吉山 繁幸（五十音順、敬称略）

「施設見学・懇親会（3/1）」、

「取り組み事例報告①、グループディスカッション（3/2）」報告

三重大学医学部附属病院 肝胆脾・移植外科／災害対策推進・教育センター 岸和田 昌之

【施設見学・懇親会（3/1）】

令和5年5月から、西村先生をリーダーとする三重大学ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業検討ワーキンググループが始動しました。この会議では、三重県の特徴を活かした施設見学および懇親会、翌日のシンポジウムの計画を進めました。シンポジウムの前日の施設見学および懇親会は、体験型学習施設である伊勢市防災センターと伊勢神宮（内宮）の見学を行い、災害医療に関する意見交換と人事交流を目的とした懇親会を開催しましたので紹介します。

1）施設見学（伊勢市防災センター、伊勢神宮）

施設見学には三重大学から19名（教職員6名、学生13名）、高知大学から10名（教職員4名、学生6名）、和歌山医科大学から11名（教職員5名、学生6名）の合計40名が参加し、13時に津駅東口で3大学の教職員と学生が集合してバスにて出発しました。引率者には私を含め、西村先生、山本先生、森尾先生など6名が同乗しました。出発後、3大学の教職員が挨拶を行い、続いて三重大学の学生が三重県に関する豆知識を発表し、その後に高知大学と和歌山医科大学の学生が自己紹介を行っていくと、徐々に参加者の緊張が和らぎ、和やかな雰囲気の中で伊勢へ向かいました。

14時過ぎに、伊勢市防災センターに到着しました。西村先生の司会にて、2階の防災研修室で川口淳教授（三重大学大学院工学研究科建築学専攻）

による「南海トラフ・巨大災害に備えて」の演題名にて講演が行われました。この講演では、阪神・淡路大震災後の耐震政策や自主防災の推進、東日本大震災後の想定の見直し、災害時の避難者支援の強化、そして南海トラフ巨大地震に対する業務継続計画（BCP）、受援計画、減災計画の策定と実施の重要性が強調されました。これらは3大学共通の関心事であり、教員や学生から多くの質問が寄せられました。

講演の後、約30分間、伊勢市防災センターの3階にある防災体験学習室を訪れました。この学習室は「防災」「映像」「消火」「避難」「救出」「救命」「備え」の7つのゾーンで構成されています。参加者は暗闇と煙で満たされた部屋での実体験や、徐々に水位が上昇する自動車からの脱出シミュレーションなどを通じて、「見る」と「体験する」ことで防災知識と技術を学びました。これは、災害に対する備えを楽しく学ぶ良い機会となりました。参加者からは、「防災について考える良いきっかけとなった」という肯定的なフィードバックが得られました。

15時半頃、伊勢市防災センターを出発し、伊勢神宮の前に到着して鳥居前で集合写真を撮影しました。その後、約1時間、内宮の近くの橋で水害対策など、防災の観点から説明を行い、伊勢神宮（内宮）を参拝しました。さらに、観光防災として取り組まれている「おはらい町」の「おかげ横丁」を訪れ、高知大学と和歌山医科大学の参加者

に説明しながら散策しました。特に「おかげ横丁」では、医学科4年の池山陽登君（医療人材養成拠点形成事業検討ワーキンググループの学生委員）を中心に、異なる大学の学生間で積極的な交流が行われました。アンケート結果によれば、「他校の学生との交流ができて楽しかった」との声もあり、このプロジェクトの目的の一つが達成されたと感じます。16時半頃に伊勢を出発し、津に向けて戻りました。

2) 懇親会

18時過ぎ、第一生協の2階パセオで懇親会が開催されました。参加者は三重大学、高知大学、和

歌山医科大学の3大学から総勢52名（三重大学31名：教職員21名、学生10名、高知大学11名：教職員5名、学生6名、和歌山医科大学10名：教職員7名、学生3名）であり、シンポジウムの講師である日本WHO協会の中村理事長と富山大学の高村先生も参加されました。

西村先生の司会で懇親会は始まり、堀医学部長の開会挨拶に続き、高知大学と和歌山医科大学の教員からも挨拶を頂きました。懇親会は、教職員や講師、医学生が打ち解けて交流できる機会として魅力的ですが、今回は特に医学科5年生の森本茉鈴さん（医療人材養成拠点形成事業検討ワーキンググループ学生委員）が中村理事長と国際的な



図1. バスの中での挨拶
(山本先生)



図2. バス中での学生による三重県の紹介
(池山さん)



図3. 川口淳教授による「南海トラフ・巨大災害に備えて」の講演



図4. 暗闇と煙で満たされた部屋での実体験前の説明（伊勢市防災センター）



図5. 水位が上昇する自動車からの脱出シミュレーション(伊勢市防災センター)



図6. 伊勢神宮鳥居前での記念撮影



図7. 伊勢神宮内での手水舎にて参拝前に身と心を清める参加者



図8. 伊勢神宮（内宮）ご正殿前の階段にて記念写真



図9. おかげ横丁での学生人事交流
(三重大学生と高知大学生)



図 10. 開会あいさつ
(堀医学部長)



図 11. 懇親会での学生人事交流
(三重大学生と和歌山医科大学生)



図 12. 教職員と学生の意見交流
(倉石さん、森本さん、中村理事長、岸和田、堀医学部長)



図 13. DMAT隊の発表
(新貝医師)



図 14. DMAT隊の発表
(瀬野看護師)



図 15. DMAT隊の発表
(森川薬剤師)



図 16. DMAT隊の発表後にDMAT隊、3大学教職員代表、
中村理事長にて記念写真

いて発表されました。これらの発表には、学生たちが非常に熱心に耳を傾けました。

その後、三重大学オリジナルのお酒も提供され、懇親会はさらに盛り上がりましたが、翌日のシンポジウムを控えていたため、20時前に「一本締め」で懇親会は終了しました。コロナ前のような交流会が復活し、相互交流を通じた人と人とのつながりの重要性を再認識した機会となりました。

災害医療について学生目線で会話が弾んでいたのも印象的でした。

懇親会では特別なプログラムとして、三重大学病院のDMAT（災害医療支援チーム）から医師、看護師、業務調整員の立場から発表して頂きました。新貝達医師は災害発生時の現地派遣、現場での対応、患者搬送、多職種連携、指揮系統の重要性について話されました。瀬野剛看護師は、災害時の看護師の役割、環境保全、院内復興支援に関する経験を、森川祥彦薬剤師は、DMAT業務調整員としてのチーム管理、活動記録（クロノロジー）、災害フェーズに合わせて行った対応につ

【取り組み事例報告①、グループディスカッション（3/2）】

3/2に行われた第2回合同シンポジウム（参加者203人：現地84人、オンライン119人）において、1）取り組み事例報告①およびグループディスカッションを担当しましたので、紹介させていただきます。

1）取り組み事例報告①

（1）防災訓練（発表：医学科3年 岸上僚一、指導：岸和田昌之）

大災害発生時には診療科に関係なく多数の傷病

者を受け入れる必要があり、医学生にとってはトリアージの理解とトリアージタグの使い方を学ぶことが重要です。2023年9月23日には、三重大学病院で約300名の教職員と学生が参加する防災訓練（多数傷病者受け入れ訓練）が行われました。この訓練での医学生の学習効果について報告しました。

訓練内容として、120名の医学生（5年生）がE-learningによる事前学習を経て、医療者補助役、搬送伝令役、傷病者役に分かれて多数傷病者訓練に参加し、現場対応やトリアージの理解を深めました。訓練の効果を評価するための確認テストでは、医療者補助役と搬送伝令役に比べて傷病者役の学生の正答率が「1次トリアージで行うトリアージ方法の名称」で78.6%、「トリアージ区分」で88.3%と比較的低い結果が得られ、役割による学習の差が明らかになりました。アンケート結果は、現場の混乱への対応、コミュニケーションの重要性、患者の不安感の理解などを浮き彫りにしました。これらの結果から、トリアージの理解を深めるためには訓練内容の改善が必要であることが示されました。

（2）エアーストレッチャー搬送（発表：医学科3年 森井啓太、指導：岸和田昌之）

三重大学病院は伊勢湾から700メートルの距離に位置しており、南海トラフ地震による津波のリスクがあります。この地理的状況を考慮し、学生



図17. 防災訓練（多数傷病者受け入れ訓練）の動画説明

防災訓練では傷病者の垂直搬送技術を重視し、エアーストレッチャーという自吸式万能担架の使用した訓練を行いました。シンポジウム会場では、防災訓練でのエアーストレッチャーの組み立てと外来棟の階段を使った搬送演習の動画を視聴した後、各大学から選ばれた2人ずつの参加者が前に出て実際の搬送体験を行いました。

（3）iPadによるAR浸水没入体験（発表：医学科3年 村瀬翔来、指導：岸和田昌之）

最大クラスの南海トラフ地震が発生した場合、三重大学病院は約60分で1～2メートルの浸水が想定され、迅速な避難が必要ですが、非日常的な状況に対する危機意識は必ずしも高くないと考えられます。過去2年間の防災訓練にて、医学生が津波に対する実感を持つために「拡張現実（AR）浸水疑似アプリ：Disaster Scope®」を使用し、浸水体験を行いました。感想と工夫についての報告後、実際にiPadでシンポジウム会場を映し出し、水位、水の色、漂流物、水流、雨、暴風、飛来物の設定を変更して示すことによって浸水イメージを膨らませてもらうとともに、各テーブルにも配付して実体験をしてもらいました。

2）グループディスカッション（企画・運営：岸和田昌之）

三重大学、高知大学、和歌山医科大学は、南海トラフ地震発生時に津波被災し、籠城体制となる



図18. 報告者
（医学科3年生の岸上僚一さん）



図19. エアストレッチャー搬送の動画視聴



図20. エアストレッチャーに患者役学生を収納



図21. エアストレッチャーにて会場内を搬送体験中

ことが予測され、食料・医薬品の枯渇やインフラの回復が見込めない場合には、さらに病院の避難が必要になると考えられます。参加した教職員、医学生および高校生はこの状況下で限られた医療資源と搬送手段を使用し、患者の重症度や安定度も考慮して搬送の優先順位を決定する机上訓練を行いました。

訓練前半では「災害時の関係機関との連携」や「災害時運用ヘリコプターや水陸両用バギーなどの搬送手段の特性」について講義を行い、後半では各テーブル6～8名で構成されたグループ毎に分かれて、30名の患者の搬送手段と優先順位を決定するグループディスカッションを行いました。患者カードには疾患、重症度、入院経過、発災後の追加情報が記載されており、搬送手段、搬送先医療機関とのマッチング（疾患の種類や時間）などを総合的に判断し、搬送患者決定の再評価を行う必要があります。参加者は教職員、医学生、高校生と知識量や経験は異なりましたが、グループ内ではそれぞれの立場からの意見を活発に交わし

てディスカッションが行われました。

また、ハイブリッド開催であり、オンライン参加者も訓練の様子を理解できるように別テーブルにて東海ゼロ企画さんの協力を得て、Web中継を行いました。各大学から2名ずつ選出された6名の学生（三重大学代表：医学科4年生の宮崎洗匠さんと医学科3年生の森井啓太さん）が客観的根拠を積極的に言葉に発して討議を進めてもらいました。オンライン参加者からも内容が理解しやすく、共に考えることができたという肯定的な感想が寄せられました。

なお、ファシリテーターは、このグループディスカッションを成功させるために非常に重要な役割を担いますが、堀医学部長、西村先生、水野先生、山本先生、鈴木先生、吉山先生、森尾先生には事前練習を行っていただき、当日に臨んでいただきました。学生に個々の患者に必要な医療や緊急性を気づかせるように助言し、訓練を円滑に進めて頂きましたこと御礼申し上げます。

最後になりますが、企画・準備から当日運営ま



図22. 拡張現実（AR）浸水疑似アプリ：Disaster Scope®の説明



図23. 各テーブルでのiPadによるAR浸水没入体験

で多大なサポートしていただきました学務課、経営管理課、総務課、災害対策推進・教育センター

職員の皆さんに、感謝申し上げます。

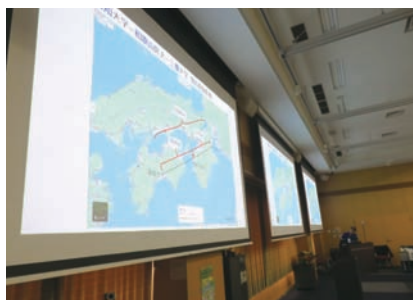


図24. グループディスカッション事前講義



図25. グループディスカッション
(ファシリテーター：堀医学部長)



図26. グループディスカッション
(ファシリテーター：西村先生)



図27. オンライン中継
(ファシリテーター：岸和田)



図28. オンライン中継中のグループディスカッション
(プレイヤーは三重大学、高知大学、和歌山県立医大の代表2名ずつ)

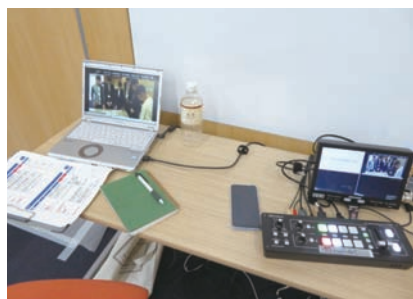


図29. オンライン中継確認機材



図30. クロージングの集合写真（大学別にハンドサインをして撮影、三重：M、高知：K、和歌山：W）

全方位カメラを用いたER教育システムの導入

三重大学医学部附属病院 救命救急・総合集中治療センター 鈴木 圭

（背景）

医学生にとって、救命救急室（ER）で行われている救命処置を中心とした初期治療に触れることは非常に重要です。ERで得た経験が将来の医

師像に影響を与えることも少なくありません。一方、ウィズコロナ時代においては、病院内での体験型実習の方法が大きく変化しました。感染のホットスポットとして特殊な医療環境であるER

で、十分な感染対策を講じた上でいかに効率的に医学教育を行っていくかは喫緊の課題でした。代替方法として、模擬症例（ペーパーペイシェント）を用いた講義などを行ってきましたが、緊張感があり、患者の息づかいや顔色といった第一印象や、バイタルサインを感じながらの従来のER実習にはほど遠い状況でした。

（実践方法）

感染対策を行いながら、従来に近いER実習を行うために、ERに全方位カメラを設置しました。学生は別室に配信される動画を視聴することが可能となりました。全方位型のカメラにより、設置場所からまさに360度の全方向の動画が記録され、リアルタイムはもちろん、録画された動画を用いた振り返りも行うこともできました。また、定点カメラと違い、学生が自由に視点を変えることにより、より没入感をもってまさにER内で実際に見学をしているような実習を行うことも可能となりました。救急医療は

チーム医療であり、スピード感を持って多数の医療スタッフがそれぞれの場所で診療を展開しています。繰り返しこの動きを確認することで、従来のリアルタイム1回の見学型実習では得られない効果もありました。

（まとめと今後）

近年、医療DXは急速に進化している。全方位カメラを用いたER教育システムは、ウィズコロナ・ポストコロナ時代のER実習に一定の効果を示しました。今後は、仮想現実（VR）や拡張現実（AR）技術と融合させ、さらに臨場感および学習効果の高い教育システムを構築していきたいと考えています。



特別講演 2

『地域基盤型医療者教育～地域で学べるこんなことあんなこと～』

三重大学医学部附属病院 総合診療部 山本 憲彦

今回は、富山大学医学教育学講座教授 高村昭輝先生に、「地域基盤型医療者教育～地域で学べるこんなことあんなこと」について御講演を頂きました。

最初に2024年1月に発生した能登半島地震支援に対するお礼を述べられました。更に、避難所でのプライバシー確保の問題、トイレの衛生上の問

題などについて問題点を挙げられ、今後も、引き続き長期の支援が必要であることを伝えられました。

その後、新医学教育モデル・コア・カリキュラム、診療参加型臨床実習ガイドライン、長期統合型プライマリ・ケア実習と地域医療人材育成について順に講演されました。

新医学教育モデル・コア・カリキュラムでは、新しいモデル・コア・カリキュラムの「医師／歯科医師に求められる基本的な資質・能力」について、総合的に患者・生活者をみる姿勢、情報・科学技術を活かす能力、多職種連携能力が、新たに加えられ、これからの医師に必要であると考えられていることを強調されました。診療参加型臨床実習ガイドラインに関しては、診療参加型の意味するところ、そして、教員は臨床実習において、最近接発達領域を意識したサポート、正統的周辺参加を促す事の重要性を述べられました。又、大学病院と地域の施設では、役割の違いから生じる経験できる疾患の違い、患者の社会的な背景を考える機会の違いがある事より、大学病院のみならず地域の施設で臨床実習を行う事が重要である事を示されました。長期臨床実習（Longitudinal Integrated Clerkships：LIC）に関しては、診療科横断、あるいは急性期、慢性期、入院、外来を横断的に診療する臨床実習である事、世界で50以上の大学で実施されており、包括的に患者のケアに継続的に関わる、継続的に臨床家と学習する環

境を維持する、同時に多分野で主たるコア能力を経験することが本クラークシップの核になることを述べられました。さらに、LICには臨床スキルの向上、学業成績の向上、学生の態度と倫理観の涵養などの効果があることが示されました。そして今後、良き地域医療人材を養成していくためには、よいカリキュラムのみならず、如何に地域の実習での陽性体験があるか、又、地域の指導医を含めた方々と良い人間関係が築けるかが重要であるとの見解を示されました。

講演後の質疑応答でも、「医学部入学前からの地域への関りについて」、「臨床実習開始時期」、「現在のカリキュラムについて」などの質問がでるなど活発な討議がなされました。

全体を通して、今後の臨床実習を効果的に進めて行くためには、地域という場の有効な活用、教員自身の教育マインド、スキルの向上が非常に重要であると感じました。高村昭輝先生には、大変お忙しい中三重までお越し頂き、目を見開かれるような御講演を頂きました事、心より感謝申し上げます。

第290回日本小児科学会東海地方会を主催して

三重大学大学院医学系研究科小児科学 平山雅浩



令和6年2月23日（金・祝）に第290回日本小児科学会東海地方会を津アストホールにて開催いたしました。本学会は日本小児科学会の分科会で、東海3県の小児医療に携わる小児科医が参加いたします。新型コロナウイルスの影響がかなり落ち着き、現地の開催が可能となりました。これまでWEB開催に移行していたこともあり、WEBでの参加を求める声も多く、今回はWEB併用のハイブリッド形式での開催となりました。一般演題数は優秀演題賞候補演題4演題を含む15演題の発表

がありました。特別講演には三重大学大学院医学系研究科皮膚科学教授の山中恵一先生に「免疫のバランスと皮膚疾患」と題して、近年アレルギー領域での分子標的薬の効果は素晴らしく、免疫学機序とも交えて大変興味深いご講演をいただきました。参加人数は現地で128名、WEBで135名と多くのご参加を頂き、地方会としては初めてのハイブリッド開催となり、活発なディスカッションが行われ、大変有意義な学会となりました。



2024ワールドキャンサードーへの参加と

三重大学医学部附属病院からのご報告

三重大学医学部附属病院・病院長、総合がん治療センター・センター長

池田 智明

三重大学医学部附属病院・副病院長、総合がん治療センター・研究支援部門長

渡邊 昌俊



2024ワールドキャンサードー
三重大学医学部附属病院でのライトアップ

2024年2月4日、三重大学医学部附属病院はUICC主催の2024ワールドキャンサードーのライトアップに参加しました。ライトアップは、附属病院1階の休憩コーナー（ウッドデッキ）で行い、この場所は患者さんの憩いの場で、晴れた日には飲食や休憩に利用され、クリスマスにはライトアップされています。がん支援部門の河村知江子係長により、ライトアップが行われました。

UICCとは何か？真っ先に頭に浮かぶのがUICC

TNM分類です。がんの進行度を判定する基準として利用され、28の部位ごとに各種の検査結果から原発がんの大きさ、広がり、深さをT、原発がんの所属リンパ節転移の状況をN、他の臓器への遠隔転移状況をMとして分類し、それらを統合して病期を判定しています。そのUICC（Union Internationalis Contra Cancrum、2010年より英名はUnion for International Cancer Control：国際対がん連合）は、1933年に設立された国際的な民間の対がん組織連合で、がんの制圧を中心課題として活動しています。ジュネーブに本部が置かれ、現在は世界155カ国から800団体が参加しています。UICC日本委員会のメンバー組織は、がん研究会、国立がん研究センター、日本癌学会、日本癌治療学会など30団体から構成され、大学では、三重大学医学部附属病院と東京慈恵会医科大学の2校が参加しています。今回のワールドキャンサードーのレターにおいて、2022年11月に、本院に総合がん治療センターを設立されたことを報告しました。本院は都道府県がん診療連携拠点病院、小児がん拠点病院、がんゲノム拠点病院として国際水準のがん診療と研究を推進しています。がん

診断・治療を専門とするセンター施設とは異なり、医学部附属病院の利点を活かしつつ、(1)患者を中心に据えた診療科・職種横断的な臓器別Unit医療を推進し、医療の質を向上させる、(2)県民はじめとする患者さんに対し、本院の有するがん診療機能をセンターとして集結させ、最新のがん治療をサポートし、継続して提供する、(3)質の高い研究を推進するなどの目的を掲げています。組織としては、小児・AYAがん治療部門(平山雅浩部門長)、成人がん治療部門(問山裕二部門長)、先端がん治療部門(奥川喜永部門長)、がん支援センター部門(水野聡朗部門長)、研究支援部門(渡邊昌俊部門長)よりなり、それぞれの部門に、臓器あるいは治療別にUnitが存在します。現在、県内のがん患者の1/3程度が大学で治療を受けるようになり、また、がん医療対策に関して、県との連携も十分できる体制を構築していま

す。今後、県民へのがん治療のみならず、UICCの活動にも参加し、日本のみならず国際的にも貢献していく所存です。



総合がん治療センター設立記念 市民公開講座記念撮影
(国立がん研究センター中釜理事長、池田病院長を囲んで、各部門長)

学位記授与式

令和5年12月20日(水)、伊藤学長より8名の方々に三重大学博士(医学)の称号が授与されました。学位記は22日(金)に医学部附属病院(研究科長室)において、堀研究科長より授与されました。

令和6年3月25日(月)三翠ホールにおいて学位記授与式が挙行政され、伊藤学長より23名の方々に三重大学博士(医学)、5名の方々に三重大学修士(医科学)、2名の方に三重大学博士(看護学)、9名の方々に三重大学修士(看護学)の称号が授与されました。



三重大学医学部の理念

Mission and Core Principles of Mie University Faculty of Medicine

確固たる使命感と倫理観をもつ医療人を育成し、豊かな創造力と研究能力を養い、人類の健康と福祉の向上につとめ、地域および国際社会に貢献する。

Mie University, School of Medicine aims to raise medical personnel with a steadfast sense of mission and ethical view, and to cultivate in it students and faculties both rich creativity and research capacity.

The school will strive for development of human health and welfare and contribute to regional and international society.

— 編集発行 —

三重大学 医学部ニュース編集委員会

〒514-8507 津市江戸橋2-174

国立大学法人 三重大学医学・病院管理部

TEL. 059 (232)1111(代表) FAX. 059(232)7498

E-mail : s-hisyokoho@mo.medic.mie-u.ac.jp
